学苑・近代文化研究所紀要　No. 851　39〜53（2011・9）

〔資　　料〕

昭和 40 年代の生活世界（その 5/まとめ）

―新聞記事にみるアパート団地・ニュータウン・郊外住宅―

西　脇　和　彦

Lifestyle in the Showa Era 40s: Apartment Developments, New Towns, and Residential Suburbs as Reported in Newspapers

Kazuhiko Nishiwaki

1　はじめに

筆者は「昭和 40 年代の生活世界」（その 1〜その 4）(註 1) において，毎日新聞・朝日新聞・讀賣新聞・日本経済新聞の 4 紙（東京版）から，日本の郊外に関する新聞記事をピックアップし，その資料集を作成した。そこでは戦後に展開したマス的郊外（サバービア）に発生した数々の現象をリアリティをもって追体験することができた。郊外生活には現在に通じる「近代化」の先駆的，象徴的な生活世界を数多く見いだすことができる。欧米スタイルを志向するサラリーマン家庭はその最たるものといえる。高度成長は国民全体に生活レベルの向上をもたらし，一億総中流の意識を実感させたが，この国民生活の豊かな実相をいち早く顕在化したのも郊外生活，ことにアパート団地・ニュータウンであった。しかしこれらは時を経て皮肉なことに，少子高齢社会・無縁社会という現在進行形の姿をも先駆的に反映するものとなってしまった。その一例を示してみよう。

［老境迎えるニュータウン］［住民のきずな　再生模索］（『朝日新聞』2008. 6. 22 付）
　高度成長期以降，都市部での住宅難解消を目的に開発が相次いだニュータウンはいま，徐々に老いの時期を迎えつつある。建物と住む人，双方に進む高齢化は建て替えの難航や孤独死など深刻な問題をはらみ，各地で再生へ向けた取り組みが広がっている。

これらに関連して現代社会学では「新しい公共圏」を模索し，学際的にもリノベーション(註 2)をはじめとする再生への取り組みが喫緊の課題となっている。

本稿ではこうした問題意識のもと，昭和 40 年代シリーズのまとめとして，前掲の資料集を総点検し，昭和 40 年代の意味を郊外化という視点から把握しようとつとめた。現代生活からどのような評価を昭和 40 年代に下せるであろうか。現代生活のルーツを確認する作業でもある。

本稿でのまとめ方として，まず資料集から内容的に現在も継続進行中の現象に注目し，その記事をピックアップし，それらを 4 事象に分類した。その 4 事象とはスプロール化，生活環境，コミュニティ，家族であるが，各事象に帰属する 4 紙記事の見出し（あるいは小見出し）を抽出した。そのなかには記事内容を再録したものもある。継続性を具体的に確認したいと考えてのことである。そして次に

各事象についてコメントを加え，当時の社会的意味，位置づけも考察した。最後にこのシリーズの総括を企図した。

以下，新聞の見出しおよび再録を，スプロール化，生活環境，コミュニティ，家族の順に分類し，抄出する。なお以下において，［　］は記事の見出し（あるいは小見出し）を，（　）は新聞発行日を示している（年号は昭和)。(なお引用記事の表記は当時のままとしたが，漢数字の表記の一部はアラビア数字に改めた)。

2　スプロール化

【毎日新聞】

［山林や田んぼのまま　値上がり待つ地主］(43. 8. 24)

庶民のマイホームの夢はざ折するか，あるいは通勤 1 時間半，40 キロ圏へと遠のいていく。

［首都圏ドーナツ急膨張　おうちがだんだん遠くなる］(44. 4. 3)

政府が住宅政策の重点の 1 つとして打出している“職住近接”の方針は完全に空念仏に終わり，現実は“職住遠離”に拍車がかかっている。

このため通勤時間が 1 時間半－2 時間という“通勤旅行”型もザラ。

［マンション郊外へ　中堅層をねらって］(44. 10. 15)

［もう手が出ない　マンション建設　都心から郊外へ］(45. 12. 8)

［ニュータウン聖蹟桜ヶ丘］(47. 9. 29)

「ハイク」から「通勤」拠点に

［進む人口ドーナツ化「東京は職場，家は近県」］(48. 2. 13)

埼玉，千葉，神奈川は半都内　都の調査

【朝日新聞】

［道遠い“持家”　建設省調査］(43. 3. 1)

［ブーム呼ぶ　マンション　地の利・月賦制度が魅力］(43. 8. 23)

マンションといえば原宿，青山，麹町などと相場が決っていたものが，いまはどんどん郊外にも進出，埼玉県川口，大宮，神奈川県藤沢，都下小金井，国分寺あたりでも目白押しだ。

［遠足に行って…宅地見物　ハイク道ずたずた］(45. 5. 6 夕刊)

【讀賣新聞】

［“ベッド化”進む　首都圏都市］(42. 6. 12)

［高速道路と農地攻防戦］(42. 7. 13)

“億万農家”もでる　ねらわれるインターチェンジ周辺　“山奥”が“市街地”に

【日本経済新聞】

［多摩田園都市　“住宅誘致”にやっき］（41.9.28 夕刊）

［都心の出版社　倉庫を郊外へ移す　本を集中・能率的に管理］（42.10.6）

［ふくれる“ドーナツ”　東京圏の人口〈上〉］（42.12.12）
　東京がポンプ役　周辺3県へ吐き出す　大半が23区に職場

［ふくれる“ドーナツ”　東京圏の人口〈中〉］（42.12.13）
　広がる通勤圏　周辺，軒並み急増　都心の空洞化現象進む

［ふくれる“ドーナツ”　東京圏の人口〈下〉］（42.12.14）
　公団団地の建設を契機にその周辺には民間業者の分譲住宅などがわんさと押しかけ，たちまち“新しい町”ができあがっていく。これには国，私鉄の通勤電車の増発，複線化の進展，地下鉄と私鉄の相互乗り入れの実現など都心と近郊を結ぶ交通機関の発達も一役買っているといえよう。

［近郊新時代①　企業タウン］（43.1.7）
　地元と企業一体に　田園の中に理想都市

［近郊新時代③　衛星デパート］（43.1.10）
　“衛星デパート”構想が次々と出てくる背景は都心から分散する多くの人口をかかえた近郊が鉄道や道路網の整備，それに自動車の急速な普及と相まって膨大な購買力を吸収し得る力をつけはじめたことにある。

［自動車普及にも“ドーナツ”］（43.1.31）
　周辺3県の保有急増

［行き場を失う火葬場　三多摩］（43.8.25）

［工業団地　快調な売れ行き］（43.8.31）

［進む農地転用］（44.3.23）

［三多摩は大学ラッシュ　地価割安「東京の大学」に適地］（44.4.3）

［宅地造成　30キロ圏内にふえる］（44.5.28）

［都市は造られる］（44.9.5）
　丘陵開き人口40万　民間主導の住宅建設　多摩田園都市が象徴

［「団地都市」が続々］（45.2.21）
　30〜50キロ圏へ飛ぶ　はるばる満員の“通勤旅行”“首都圏残酷物語”はエスカレートするばかりだ。

［進むスプロール］（45.5.29）
　農村へ丘へと伸びる

［郊外マンション花盛り　60キロ圏にも続々　一戸建てはもはや夢？］（48.9.27）

［難問かかえて　ふくらむ通勤圏㊤］（48.10.27）
　マイホーム求めどっと　いまや70キロ圏まで

3　生活環境

【毎日新聞】
［公団　団地の青空駐車に注意］（41.10.1）

［プロパン，近郊を制す 「機雷原です」と消防陣］（42.11.11）

［ドロンコ新興住宅地］（43.4.27）

［新興住宅地を抜打ち検査　悪質業者を摘発］（43.11.30 夕刊）

［交通不便＝きらわれた団地］（45.5.8）

［“欠陥団地” 直してヨ　主婦パワー，公団へ］（46.9.14）

［深刻…団地の車と駐車場］（46.11.18）
　急速にふえる自動車に駐車場が追いつかない。とりわけ団地では深刻な問題になっている。

［2DK じゃイヤ］（47.8.3）
「2DK 時代は過ぎ去った。これからは 3DK 以上でないと」と公社の関係者は頭をかかえ，見通しの甘さを悔やんでいる。

【朝日新聞】
［やっと手にした住宅地］（43.5.21）
　バス停前というのが停留所を見おろす山の上だったり，ずいぶんとあきれたものだ。（横浜市南区笹下町　氏名略・34歳・主婦）

［曲りかどの公団分譲住宅］（43.7.6）
「遠くて狭い」はご免　建てれば…の時代去る
　公団の戸数消化主義が，反省を求められる時がやって来たのだ。

［東京郊外　危険な中小河川　急な都市化で流量増加］（43.9.16 夕刊）
　田畑に家が建ち，舗装が進むにつれて，雨が地中にしみ込まなくなり，側溝を通って川に注ぐためだ。

［団地のエレベーター　停電が“盲点”］（43.12.6）
　非常ベル　ボタンが高く子供は届かぬ

［お産に悪い団地の５階］（44.7.14）
　上り降りが響く　死産は全国平均の倍　名古屋で調査

［緑と太陽はどこに？　郊外地に市街化の波］（46.11.4 夕刊）
　住宅地とは何なのか，増大する宅地需要と，住居環境の保全とをどう調整すべきなのか。

［団地受難］（47.9.4）
　保育所への配慮がなっていない。

【讀賣新聞】
［団地のマイカー族］（42.11.13）
　お手上げの駐車場

［健康家族　きたない室内の空気　炊事時が一番危険　“換気扇のすすめ”］（43.2.23）

［“ムード”を売る郊外レストラン］（44.4.19）
　商売は夜が中心。最初のピークは８時前後。家族づれが多い。二度目は午前１時。若者であふれる。

［恐怖の団地エレベーター　胸にナイフ 11 階へ　深夜，強盗が待っていた］（45.1.26）

［パンク寸前の団地の焼却炉］（45.10.24）
　家庭からはき出されるゴミのなかに，塩化ビニールやプラスチック類が急増，有毒ガスが発生したり炉がこわれたり，団地はもちろん，付近住民にまで被害がおよんでいるためだ。

［“抵抗”の実り　団地のミニ菜園］（45.11.12 夕刊）

［“エレベーターに注意せよ”　団地住民自衛パワー］（46.3.24）

［都会の恐怖“エレベーター殺人”高層団地，女性襲われる］（46.6.14）

［新興住宅地で幼女殺される　変質者が連れ出して］（46.6.16）

［若い女性殺される　小山の新興住宅地　帰宅の夜道］（46.11.9）

［団地に白昼強盗］（46.12.8 夕刊）

【日本経済新聞】
［団地で「朝市」］（41.11.22 夕刊）
　新鮮な野菜を産地から

［無防備の郊外団地］（42. 6. 10）

［近郊農家　都市化に乗って直売商法］（43. 4. 9）
近郊農家の後継者がはじめた日曜花屋，農協の鶏卵直売，また千葉市の団地に現われた園芸協会の野菜直売などが消費者の人気を集めている。いずれも人口急増地帯のサラリーマン家庭に新鮮な農産物を安く供給する半面，生産者は共同で農産物を直販して，流通コストを引き下げ，安く売ってもうけるという“一石二鳥”の効果を生んでいる。

［農業も育てるニュータウン］（43. 6. 20）
生産緑地を確保

［大量消費を追う］（44. 9. 6）
商業立地の郊外化現象をいち早く予測して郊外のショッピングセンターに真っ先に名乗りを上げたのが東京・世田谷に目下建設中の玉川髙島屋ショッピングセンターだ。

［多摩ニュータウン　都，職住近接を事実上断念］（45. 10. 30）

［緑がいっぱい］（48. 5. 10）
工業団地，住宅団地の別を問わず，最近は環境保全，とりわけ緑化がきわめて重要になってきた。

［“DK 信仰”の功罪］（48. 11. 8）
「明るい台所」生む
洋式の水洗トイレも団地に採用され始めてから急速に普及，今日ではくわしい使用法を書いたレッテルも姿を消した。下水道の整備を後押しする効果もあった。
このほか団地は雨戸，神棚，床の間など日本の住宅特有のものを追放した。（中略）良かれ悪しかれ，団地が日本の住生活，住居観に革命的な変化をもたらしたのは事実である。

［レジャー農園作り推進　神奈川県］（48. 11. 23）
近郊農家に援助して，農地を果実のもぎ取り園や家庭菜園にするもの。

［グリーン作戦］（48. 11. 25）
大木で即効ねらう　菜園が育てる緑への愛着

［人と車を完全分離］（48. 11. 29）
事故防止のキメ手

［カラー作戦］（48. 12. 6）
くすんだ灰色返上

［“団地三遷”］（48. 12. 12）
家族構成に合わせ　新しい住環境づくり進む
家族構成の変化とともに住みかえができれば…

4　コミュニティ

【毎日新聞】

［“本当にむずかしいワ”　近所づき合い］（41.6.29）

［近隣への態度］（41.7.25）
　“開国型”と“鎖国型”と　つき合いは階段から始まる

［エチケット（上）］（41.8.10）
　ゲタの響き，テレビの音　ベランダの干し物にも注意
〈音に無関心たるべからず〉〈ベランダは国境と思え〉

［エチケット（下）］（41.8.11）
　プライバシーの確立
〈階段は団地の社交場と心得て〉〈見栄は他人迷惑〉〈他人の生活に好奇心を持つな〉

［自治会運営のむずかしさ］（41.8.22）

［団地族の意識調査から］（42.9.20）
　“仮住まい”で乏しい連帯感

［不正相つぐ団地自治会］（43.7.29）
　上意下達　住民の無関心がカベ

［わがふるさと　団地］（44.9.12）
　ここで成人した愛着　自分たちの生活の場として　いつまでも“ふるさと”守ろう

［車のある人，ない人…団地の対立　駐車場づくりをめぐって］（46.4.25）

［団地族の意識　公団がアンケート調査　近代的で進歩的　でも個性がない］（47.6.1）

【朝日新聞】

［主婦の生協　みんなの力で実現　横浜市営・十日市場団地］（42.6.15）

［女性ばかりの自治会執行部　役所を説得して児童館　千葉市小仲台団地］（42.6.22）

［団地集会所でのおつや］（43.1.17）（埼玉県入間郡富士見町鶴瀬団地　氏名略・26歳・主婦）

［団地共益費　平均四割も値上げ　四月から　自治会は反対運動］（43.2.15）

［値上げする団地共益費］（43.3.1）

［“泣寝入りは損ですヨ”　公団住宅の共益費値上げ問題］（46.5.8）
　粘った団地で引下げ・据置

【讀賣新聞】

［対立する2集団　プライバシー派と社交派と］（41.8.22 夕刊）

［わが団地は“主婦内閣”　国立団地自治会］（41.11.14 夕刊）

［団地　音の悩み］（42.2.7）
　話し声で眠れなかった　「下には人が住んでいる」そんな気使いも必要

［大はやり　団地の夏祭り］（42.8.11）
　“二世”にふるさと感を　住民の連帯感強める

［“連帯感”乏しい団地族］（42.8.31）
　これは文部省が団地族に下した診断

［団地“文部省診断”に異議あり］（42.9.2）
　“一面的なきめつけ”努力している姿見ずに　“永住派”が多数　都心が近く便利なら

［交流を生む黒板］（43.1.13）

［やかましくするな　窓をあけて騒ぐな　おそく入浴するな］（43.3.5）
　野中の一軒家ではないことをはっきり自覚して生活することが“健康な団地暮らし”の条件だ。

［駐車場めぐる論議　使わない人には損］（43.3.14）

［“付き合い”不在　絶えないいざこざ　願いは“良き隣人”］（43.3.15）

［すれ違う生活意識　子どもの世界にも］（43.3.23）
　団地ができると，新しい市民が古い地域社会に突然住む。新旧2つの住民はちがった生活意識をもっている。

［敬老会もいっしょ　心のカキ取り除く］（43.3.28）

［地元と協力の時も　だが堅い排他意識］（43.3.30）

［盲点・団地駐車場］（44.4.10）
　あいまいな管理　不審車確認を怠る

［広がる　団地の自主管理］（47.10.29）
　安くなる負担金が魅力

【日本経済新聞】

［県外勤務者は無関心　神奈川県民の自治意識］（43.4.23）

県外に勤務しているベッドタウンの住民は県政に対する関心，県民意識が薄い―などがわかった。

［団地に育つかコミュニティー　交流望む声は多い］（47.8.28 夕刊）

カギ握る自治会の役割

近所付き合いの薄くなった団地外の住民に比べ，団地の住民は，自分たちの社会を自治活動の盛んなコミュニティーと考え，新しい近所付き合いの芽が生まれかけているようだ。

［近所づき合い］（48.12.7）

きっかけが少ない　欲しいパブや図書館

［パリからの警告］（48.12.13）

ふえた無気力主婦　人間本位の町づくり急げ

5　家族: 夫婦・親子・こども

【毎日新聞】

［宅地進出で車ブーム　三多摩が全国一 2.4 軒に 1 台］（41.1.6）

［団地にかなでる　ピアノ教室］（41.1.25 夕刊）

［おけいこブーム］（41.8.3）

“おけいこごと”のゆきすぎで，学校の授業中も元気のない子が目立っている

［団地学校］（41.8.9）

団地の家庭は比較的学歴の高いホワイト・カラーが半数以上。

【朝日新聞】

［団地夫人の健康　生命保険会社の集団検診から］（41.8.19）

3 人に 1 人が「要注意」 無関心ぶりに驚く医者

［「社宅」よりも「持家制度」］（41.10.23）

［朝食ぬきの小学生　埼玉県福岡第二小の調査から］（42.6.29）

［団地の主婦は働き者］（43.5.30 夕刊）

国民生活研の調査　3 割弱が共かせぎ・内職

［団地のゴミに乳児死体　町田］（44.11.18）

“母性喪失”の時代　乳幼児受難　世間も慣れっこ

［私は“団地未亡人”かしら？］（46.2.18）
　この住いはわが家から一家だんらんの夜のひとときも奪ったし主人の生命をすりへらしているのかもしれない。（町田市木曽町　氏名略　主婦・30歳）

［ペア住宅か4DKがほしい　住宅公団のアンケート］（48.9.14）

［親子を同じ団地に］（48.10.17 夕刊）
　住宅公団が来年度から採用方針　“セット入居”どうぞ

【讀賣新聞】
［子供の成長と高層アパート］（41.5.20）
　幼児の遊びということを考えてみると，地上の遊び場と高空の住まいが非常に離れていることは決定的な問題となる。

［亭主へのシワ寄せ　郊外に家を建てるということ］（41.6.5）
　世の中が複雑化するほど，健康と環境の関係は密接になる。

［団地夫人と健康］（41.10.13）
　不調に気づいても診療うけぬ人が多い

［団地に多い“閉じこめ老人”］（41.12.12）（長野県松本市・会社員・氏名略）

［こどもの世界　知能，成績とも優秀］（43.1.30）
　ママの熱意が結実している。

［遊びの自立時期　高層っ子はおそい］（43.2.6）

［5階の窓から“ママ!!”　2つの幼女転落死］（43.7.20）

［9階のマイホーム悲劇　ベランダ乗り越え坊や転落］（46.1.27）

［マイホームの支払い重く　2児の母が自殺　千葉の分譲団地］（46.6.5 夕刊）
　愛だけでは暮らせない。

［団地の4階，坊や転落　もたれた網戸もろとも］（46.8.15）

［9階から転落，助かる　多摩の団地で1歳の坊や］（47.10.24）

【日本経済新聞】
［宅地向け農地転用盛ん］（41.9.1 夕刊）
　千葉などの通勤県で　“持ち家”への熱意反映
　これは“サラリーマンに持ち家を”の政策とともに，一般勤労者が自分の土地，家を入手しようと強い熱意

をもってきていることの現われとみられる。

［団地は子供を弱くする　外出ぎらいで運動不足　厚生省の委託調査］（46.3.1 夕刊）

［洗たく機の上で遊ばせ　幼児4階から転落　せまい1DKの悲劇］（46.8.15）

6 考　　察

1）スプロール化

高度成長期の後半に相当する昭和40年代になると，首都圏の場合，東京都内よりも都下での人口増加が顕著となった。都内人口は頭打ちになったが，増加分はいわゆる郊外地域で吸収されたのである。鉄道沿線に沿う形で直線的にさらには平面的に郊外は開発されてきた。そしてこのトレンドは都下から東京隣接県の東京寄り地域へと継続されていった。隣接3県の東京寄りは半都内的地域であり，住民の意識も半都民的であるといわれている。

こうした状況下で郊外居住者の通勤時間は必然的に増加した。当時の記事にはすでに，通勤1時間半から2時間で，40キロ・50キロ・60キロ・70キロの指摘がある。これは片道の話であるが，現在の新郊外（遠郊）に属する範域(註3)が当時すでに登場していたわけで，驚くばかりである。職住分離もそれが職住遠離まで進行してしまうと，通勤とはいえもはや通勤旅行を想起させる。特急電車を使用する通勤客も生まれ，その数も増えるわけである。

また郊外住居が一戸建とは限らない。コスト面，管理面からマンション建設も駅周辺で進んだ。そして鉄道網の整備(註4)はもちろんのこと，高速自動車道路の時代も迎え，インターチェンジ周辺への関心も見られるようになる。流通の基点となりうるからである。商業（卸）団地の紹介もあった。

また郊外にはそのほか，学校・デパート（ショッピングセンター）・工業団地も存在するが，その一例として大学の郊外（たとえば多摩地域）進出，出版社の倉庫を都心から郊外に移転したケースなどが紹介されている。

このように，マス的スプロール化については当時にその起点があり，現在も継続されている事象であるが，半世紀近い年月を経てこのスプロール化は生活のなかに定着し，さらには多様な姿を示すようになった。

2）生活環境

昭和40年代の目標耐久消費財といえば3C（カー・クーラー・カラーテレビ）であったが，これらの普及率は40年代後半から上昇したのであり，40年代前半にはそれほどの拡がりはなかった。しかし一部の団地では40年代前半からマイカーと駐車場の問題が浮上していた。ということは，この一部団地生活者のなかには中流とはいえアッパー層に近接する人々がいたことになる。詳細に見ると，中流層といっても現実にはそのなかに格差があり，現在も事情は同様である。中流上層，中流中層，中流下層…今日いうところの「下流社会」とはこのなかの中流下層にほかならない。

またこの段階で，部屋数の少なさ，交通の不便さ，インフラの未整備，保育所の不足，団地設備の不備，治安の悪さ・盲点などが指摘されている。これらの団地建設はまずは建設ありきの戸数消化主義から居住者のニーズに即した質的充足段階への進展を示唆するものであった。今日的パースナル化

には及ばないにしても，緑化策など住環境に対する環境保全も指摘されていた。この段階ではまだ地球温暖化への危惧ではなく，素朴なグリーンへの渇望であったが，緑化策の必要性は早くから指摘されていたのである。こうして多様化の段階に移行したことは明白であった。

そのほか生活環境で注目したいニュース記事を2つあげておく。1つは舗装の拡大により雨水が地中に浸透しなくなり，河川が急激な氾濫を惹き起こすようになったこと。これは現在にも続く深刻な都市化現象であり，その危険性がそれほど知られていない盲点といえる。もう1つは近郊農家が提供する農作物を郊外（地域）住民が新鮮なうちにしかも安価にて購入できるメリットがあるというニュース(註5)である。当時「地産地消」なる用語はまだなかったが，まさにこの好事例である。家庭菜園・団地菜園・レジャー菜園，これらも地産地消の同一範疇に属するのである。

生活環境に関連する事象にはこのほかにも今日まで継続中の郊外型ショッピングセンター(註6)などを確認することができる。

3）コミュニティ

コミュニティは空間的概念であると同時に心理的概念でもあり，社会心理的性格をもっている。コミュニティは外延的には地域社会であるが，そこで生活する人びとに各自がその地域のメンバーであるという帰属共有意識を内包的に醸成するのである。これに沿って団地や郊外住宅地を見ると，転入当時は近隣との付き合いに戸惑い，むずかしさを実感したのであった。しかし勤め人家族として家族構成や生活パターンの類似性から徐々に隣人関係の調整が図られた。そこでの社交術，エチケット・マナーが生活体験から学習されていった。生活音対策はその最たるものであろう。また，自治会活動，生協運営，お花見・夏祭り・盆踊り・ラジオ体操や運動会，日帰り旅行など交流の場が設けられ，交際や親睦が深まったコミュニティもある。ここで生まれ育った世代にはいつしかここが自分の故郷となる。決して仮寓ではない。現在の団地ブームにもこの潜在意識があるのではなかろうか。しかしこれにも温度差があり，近隣とのトラブル，犯罪や時代を反映しての駐車場問題といったネガティブな生活環境の共有もあった。当時の団地にはマイカー時代を想定した配慮はまだなかった。いくら類似した団地住民とはいえ貧富の差は存在していた。周囲とのいざこざ，経済力の違い，家庭内の都合から転出した人たちもいたのである。転出先には同一の生活圏内もあれば他地域への転出もあった。

高度成長期も終末に近づき日本の社会は次第にサービス化社会に移行していく。勤務時間や出勤日の多様化，女性の社会進出，専業主婦の減少など，時間や空間の共有がコミュニティに限らず，家庭においても実現しにくい時代となっていく。

4）家族

団地や郊外住宅に居住する家族はそのほとんどが勤め人を世帯主とする家族構成をもっている。生業の場が家族外にあり，規則的にそこまで通勤する。高度成長期に第一次産業就業者の割合が激減したが，これは職住分離の生活パターンが加速され，従来の生産機能を中心に多機能を有する複合家族から消費を中心とした友愛家族に家族の本質が転化したことを意味する。封建的な古いしがらみから解放された若夫婦やその子どもから構成される近代家族である。ここにマイホーム主義が成立する。持ち家，家電，マイカー，ピアノはその大型具象物である。また，家族内に家事労働は残存するがシャドーワークとなり，世帯主の外部労働は見えにくく不明瞭なものとなる。家族の複合機能は外部化

し，高度成長期以降の家族がたとえば教育（しつけ）機能，保護（介護）機能において弱体化するのも必然であった。アウトソーシング家族の誕生である。子どもの社会化も一部外注化され，しかも長期化が必然となった。当時はまだモラトリアムという用語は登場しないが，今日的課題のルーツをここでも見ることができる。

こうした状況下で，団地の主婦あるいは高齢者のなかには周囲から孤立するケースも出始めた。今日ほどのパースナル化は進行していないものの，小家族・核家族が孤立するとどのようなリスクを生じることになるか，今日的課題のケーススタディがすでに存在していたのである。狭いながらも楽しい我が家のマイホーム主義がこの時代の家族的特徴とされていたが，家族メンバーの身体的精神的健康への警鐘が存在していたことにも注目しておきたい。さらに高齢の親を扶養するため，従前の同居型ではなく近居を提案するなど高齢社会へのヒントがすでに示されていたことには驚くばかりである（セット入居）。もちろん，高度成長期の終末は高齢化社会の入り口でしかなかったため，医療・福祉の本格的社会化を示唆するものは登場しなかった。依然として何かにつけ現役世代を無意識のうちに前提とし，家事・育児・介護は女性の役割であることを当然視していたのである。

7　おわりに

現在の生活に通じるあるいはルーツと考えられる昭和40年代の郊外型生活世界をスプロール化，生活環境，コミュニティ，家族の4事象に整理しコメントを加えた。なお，本稿でとりあげた4紙記事の見出し数を一覧表にした（表1）。その結果，各紙ともマクロからミクロまでの視点をもっているが，4紙のなかでも『日本経済新聞』はよりマクロな視点が強く，反対に『讀賣新聞』はミクロな視点に特徴があった。また『毎日新聞』『朝日新聞』は先の2紙の間にあって中間的メゾ的スタンスということができる。

今回の考察から高度成長期とはいえ，昭和40年代は量的確保から次第に生活の質的充足に向かう時代であったことがわかる。生産者（送り手）主導の時代から消費者（受け手）ニーズに配慮せざるを得ない時代への転換である。まさに多様化といわれるサービス化社会の到来を予告する，その胎動の時代であったといえよう。

現代社会学に近代を2種類想定する考え方がある。ファーストステージとセカンドステージがそれである。前者は量的拡大をベースとし，後者は前者を深化させ質的充足を促進するステージである。パースナル化がそのベースにあり，究極の姿は個人的ニーズを最優先する多様性のステージである。これまでの近現代に関する社会論のほとんどはファーストステージに帰属するが，高度成長期自体も

表1　新聞4紙からの引用見出し数

	毎日新聞（%）	朝日新聞（%）	讀賣新聞（%）	日本経済新聞（%）
スプロール化	6（21）	3（13）	2　(5)	18（47）
生活環境	8（29）	7（29）	11（28）	13（34）
コミュニティ	10（36）	6（25）	15（38）	4（11）
家族	4（14）	8（33）	11（28）	3　(8)
合計	28(100)	24(100)	39（99）	38(100)

（%）は小数点以下四捨五入

その例外ではなく，物的豊かさを追求したファーストステージに属する。しかし昭和40年代はその最終段階に相当し，セカンドステージへの移行を示唆する現象が散見しだした時代ともいえる。

近代生活さらには現代生活の変容を，アパート団地や郊外住宅など郊外型生活の諸相から考察する視座は今後も有意味であると考える。たとえばファーストステージの「公共の福祉」はセカンドステージでは「新しい公共圏」としてどのような変容を遂げるのであろうか。グローバル化が進行するなかでの「新しい公共圏」とは。価値観の多様化時代にあってどのように対処するのか。近代のセカンドステージは別名リキッドモダニティといわれるほどに，絶対的基準が存在するのではなく，相対的・流動的基準の世界といわれている。その方向性あるいは可能性を郊外生活とその生活者の「ゆるやかなつながり」のなかに追究したいと考えている。

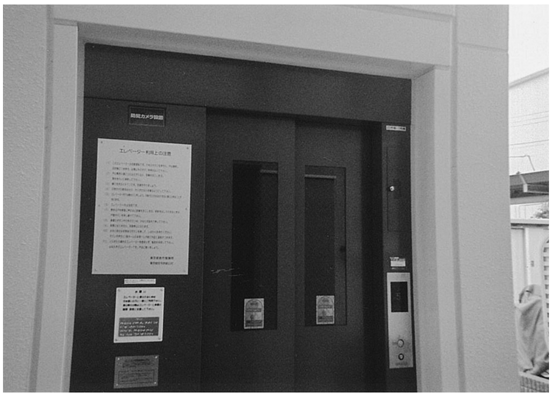
註

（註1）

西脇和彦「〔資料〕昭和40年代の生活世界（その1〜その4）」『学苑・近代文化研究所紀要』No. 803，815，827，839，昭和女子大学，平成19年9月〜平成22年9月

（註2）

当初5階建てアパートにエレベーターは設置されなかった。そこで後付としてエレベーター棟を階段と対面させる位置に建設した都営狛江アパートのケースを紹介する（写真左: エレベーター棟外観，写真右: エレベーター棟正面）。同所では現在約50棟の半分にエレベーター棟が設置されている（同自治会の説明による）。



（註3）

新郊外（遠郊）の一例として小田急線の鶴巻温泉駅をあげた（写真左）。周囲にはその名の通り温泉（鉱泉）やハイキングコースがあるが，現在は郊外住宅地の雰囲気が漂う。日中は駅前の駐輪場，駐車場はほぼいっぱいである（写真右）。また夕刻は電車が到着するたびに，駅前道路にはお迎えのマイカーが列を成す。

（註 4）

複線化の進展例として小田急線成城学園前駅周辺の様子（写真左）を，地下鉄と私鉄の相互乗り入れの実現を代々木上原駅（写真右）のケースで紹介した（前者では両側が各駅停車用線路で中央 2 線路が特急・急行用，後者にあっては両側が小田急線，中央が地下鉄千代田線）。

（註 5）

写真は JA いせはら（比々多）農産物直売センター。地元の新鮮な朝採り野菜・花卉・タマゴ，米，豆腐，ジャムやジュース，漬物，園芸用品が販売されている。「毎日新鮮，豊富な野菜」がキャッチフレーズ。生野菜のおいしさは格別で，花の活きのよさと日保ちのよさにも驚く。撮影時刻が閉店間際のため人影が見当たらないが，こうした JA の農産物直売所はどこも午前中が大盛況である。

（註 6）

写真左は現在の二子玉川駅周辺。いまや現地は人気スポット。ショッピングセンターには約 2000 台を収容する駐車場があるが，オープン当時がら空きであった駐車場は現在では平日でも混雑するほどになった（写真右）（撮影は 2011 年 7 月 7 日木曜日）。

掲載写真はすべて筆者が撮影した。

（にしわき　かずひこ　　文化創造学科教授・近代文化研究所所員教授）